

# 自らつくりあげた風景

## 舟尾

### 道路元標

主要地方道七尾・輪島線、舟尾橋より400m程和倉寄りの道路脇に小さな石の標識がある。

路線の起点・終点または主な経過地を表示する標識「道路元標」である。



道路元標は、大正9年施行の旧道路法施行令により、各市町村に1つずつ設置することとされていた。この道路元標には「道路元標」「田鶴濱村」と刻まれている。

さらにもうひとつ、「能登路ここは舟尾」とも刻まれている。「道路元標」や「田鶴濱村」とは明らかに違う字体、風化状態から後に彫られたものと思われる。現行の道路法には道路元標の設置義務がないことから、取り壊されたり、工事によっていつのまにか姿を消したりする道路元標が少なくないと聞いた。この道路元標は、新たに刻んだ文字に

より新しい標識として再利用することで残されたのである。舟尾町のほほ中央部にひっそりとたたずんでいる。

### 白物場

この「舟尾」の地名は、このあたりに、交易の船が繋がっていたことによるという説がある。舟尾川に架かる鉄道の鉄橋から200m程下流、川がカーブしているあたりは、白物場という地名であった。この名は、製材された木材が積んであったことからつけられたと伝えられている。



かつて、このあたりに船着場があり、船荷が積み込まれ



て、遠くは越中（富山県）とも交易したと言われている。また、この白物場には長右衛門船、弥三右衛門船という2隻の百石船がつながれていたといい伝えられている。

## 新開

舟尾の集落は、数世帯しかなかったものが、この交易で豊かになっていき、世帯が増加していったそうである。

この交易による財をもとにしたのであろうか、その後、舟尾の集落は広大な農地を造成していったのである。

これは、川尻を流れる二宮川の下流にあった古川が運ぶ土砂が河口に堆積するという条件に恵まれていたことにもよるのであろう。土砂の堆積によって浅くなった海辺に杭を打ち、少しずつ埋め立てていき農地を広げていったようである。

農地の変遷を見てみると、

藩政期に入ってから急速に農地の拡大が進み、承応年間（1652〜54）から享和年間（1801〜03）にかけての150年で30世帯以上も農家が増加した。さらに藩政期の天保年間（1830〜43）から弘化年間（1844〜47）にかけては大規模な開田と灌漑用水としての舟尾川の開削が行なわれた。

## 舟尾川のマンポ

開削は、全長約700m、

中間にある高ノ山の下にトンネルを掘って地下水路を造るといふものである。この水路は「舟尾川のマンポ」と

呼ばれている。

高ノ山の下に掘られたトンネル式の地下水路は、大小2本あり、中央部あたりで曲がっている。なぜ2本の水路を作り、中央で曲がっているのかを示す資料はないが、増水したときに水の流れを弱め、調整するためのものと言われている。この工事は当時の最先端の技術が使われた大規模なものだったのだろう。

舟尾川ができたことにより、その後さらに農地が拡大されていった。



## 頭頂亀石

この舟尾川には「頭頂亀石」という石の話が残っている。

今では農地として埋め立てられてみることはできないが、かつては、海面に突き出た人が何人も乗れるほどの大きな石であった。また、海岸からこの石へ泳ぎ着くことが、水泳の上達の基準ともなっていたそうである。海岸線がずつと手前であったことがうかがえる。

この石は海面へは大小二ヶ所出ていたため、二個の石に見えた。さらに、その姿が亀が頭をもたげている姿に似ていたという。

その昔、この石は川の上流部、千右衛門の腰という所にあり、この石の上で、集落の女性たちがそば打ちをしていた。ところがいつの頃かこの石が女性たちの仕打ちに腹を立てて、海に姿を移したと言われる。

もしかしたら、埋め立てられて農地の下になったのではなく、またどこかへ移動していったのではないだろうか。

現在の舟尾川下流は、ほ場整備が進み、きれいに整備された田が広がっている。

この風景は、地域の人たちの智慧と努力と団結が造りだした姿であろう。

## 周辺マップ

